

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年6月22日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12840

研究課題名（和文）概念形成過程の分類と法則性および諸言語への汎用性の研究

研究課題名（英文）The process of concept formation: types, regularities, and adaptation in different languages

研究代表者

岩井 茂樹 (Iwai, Shigeki)

大阪大学・日本語日本文化教育センター・准教授

研究者番号：60647080

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：「美的概念」、とりわけ「日本的美的概念」が、どのような要因で「日本的」とされたのか、そしてそうなる法則性の有無と、法則について検討を行なった。研究の結果、「わび」「さび」「幽玄」は、日露戦争後、象徴主義が移入される過程において称揚され、中世美に注目が集まった結果、「日本的美的概念」として認識され、定着したものであった。「いき」も同様に象徴主義高揚の機運の中、日露戦争後、再評価された概念であったが、これは「江戸趣味」が称揚される中で「日本的」とされたものであった。「かわいい」は現在における「日本的美的概念」とされているが、ここにも同様の背景があった。このような共通性と法則性を見出すことができた。

研究成果の概要（英文）：This research examines what leads certain aesthetics, more specifically so-called Japanese aesthetics, to be considered “typically Japanese”; whether there are any regularities to be discerned; and what the details of those regularities are. As a result, we found that wabi, sabi, and yugen became highly acclaimed after the Russo-Japanese War, as symbolism was introduced and medieval aesthetics gathered attention. This led these three aesthetics to be perceived as distinctively Japanese. In a similar fashion, iki was also re-evaluated and deemed typically Japanese after the Russo-Japanese War in the midst of a rising acclaim of both symbolism and Edo taste. Kawaii is considered a contemporary Japanese aesthetic and has a similar historical background. Our research resulted in the discovery of these similarities and regularities.

研究分野：日本文化史

キーワード：日本的美的概念 わび さび 幽玄 いき かわいい あはれ まこと

1. 研究開始当初の背景

言葉や概念というのは、どういった要因で変わるのだろうか。時代経過によって変化すること。これはわかっている。ただ、変化した時代や要因となると、なかなか特定することが難しい。なるほど、中国や西洋から新しい思想や書物、文物が入ってきたことを契機として新しい言葉や概念が作られたり、もともとあった言葉や概念に影響を与えたりすることがある。そうした実例を挙げると、枚挙にいとまがないほどである。

けれども、従来の言語研究や概念研究の多くは、変化した時期や初出の探索、そして美学的な観点からの哲学的考察、普遍的で不変な「日本的美的概念」の探索や抽出、その考察などには熱心であっても(注1) 変化した要因や変化の法則性については関心を示してこなかった。こうした従来研究によって得られた知見は決して少なくない。ただし、本研究は従来研究とは問題意識自体を大きく異にするものである。詳らかに言えば、本研究の問題意識は、従来の研究の最大の関心事であった「日本的美的概念」とは何であり、その構造とはどんなものか、といった点ではない。そうではなく、これまで「日本的美的概念」と呼ばれてきた概念にはどんな語があり、それがどういった要因でそう呼ばれるようになったのか、そしてその概念が対象とするものがどのように変化してきたのか、という点にあるのだ。それゆえ、ある「日本的美的概念」がそう呼ばれるようになる必要条件を見つけ出し、その条件と対象との関係を考えていくという方法を、本研究では採るのである。実際、すでに拙編著『わび・さび・幽玄 - 「日本的なるもの」への道程』(注2)において明らかにしたように、少なくとも「わび」「さび」「幽玄」などの「美的概念」(もちろん最初から「美的概念」であったわけではない)には何度かの語義変化が存在し、それが「日本的美的概念」へと昇華されるのは、おおよそ日露戦争後のことであり、その必要条件として、少なくとも「象徴主義」、新カント派の美学の興隆、それに続く「中世美」の見直しと、それを「日本の美」とする風潮の高まり、といった条件が必要であった。つまり、少なくとも「わび」「さび」「幽玄」が「日本的美的概念」と呼ばれるためには、いくつかの条件が必要だったというわけである。逆に言えば、そうした条件が揃わなければ、「美的概念」とは認識されたとしても、「日本的美的概念」というように「日本的」という語を付けて称されることはないのである。ただ、この前傾書によって、「わび」「さび」「幽玄」の語義および概念変化の時代特定と、その必要条件についてはある程度明らかにできたものの、「わび」「さび」「幽玄」といった「美的概念」の語義変遷に関する法則性の有無や、法則性そのものを考察するには至らなかった。したがって、本研究では「美的概念」の中でも、「わび」「さび」「幽玄」の他にはど

んな「日本的美的概念」があるのかを抽出し、その語義変化と、「日本的美的概念」と呼ばれるに至った経緯と必要条件を明らかにし、さらに語義変化や対象物の変化に関して、何らかの法則性があるのか、あるのであれば、どのような法則性が存在するのか、他の言語でも同様の傾向が見られるのか、といった点を明確化するものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下に示す(1)～(4)の四点である。

(1)「美的概念」と呼ばれる中から、「日本的美的概念」と呼ばれるものを抽出すること、(2)抽出した「日本的美的概念」の概念形成に関する特徴と、「日本的」と呼ばれるようになった必要条件を明示すること、(3)「日本的美的概念」の歴史的変遷から語義や概念変化に関する法則性の有無を検討し、法則性が見出される場合は、その法則性を明示すること、(4)他の言語、たとえば英語などでも同様の法則性が見られるのかどうかを検証すること。

3. 研究の方法

「美的概念」とりわけ「日本的美的概念」について書かれた書籍や論文を蒐集し、そこに見られる説明内容を抽出する。この際、日本語以外の文献についても可能な限り調査を行い、必要に応じて翻訳を行う。蒐集された資料から「日本的美的概念」として認識されている概念を抽出し、それを対象としてそこに見られる傾向について分析と考察を行う。

4. 研究成果

(1)1年目(平成27年度)

まずは日本語文献を蒐集し(241点)その中から「日本的美的概念」と呼ばれる概念の抽出を試みた。具体的には、「わび」「さび」「幽玄」「かわいい」「雅び」「あはれ」「数寄」「いき」「萌え」「洒落」「まこと」「しをり」「をかし」といった言葉が果たして「日本的美的概念」と呼ばれることがあるのか、といった点について確認を行った。その結果、上記の概念の内、「わび」「さび」「幽玄」「かわいい」「(ものの)あはれ」「まこと」「いき」という7語に、程度の差はあるものの「日本的美的概念」と呼ばれる事例が存在することが明らかになった。これらの内、現在、「わび」と「さび」は茶の湯や俳諧関係の文献内で、「幽玄」は主として能楽で、「かわいい」はファッションやポップカルチャー、サブカルチャーなどの分野で、「あはれ」は平安時代の物語や和歌、そして本居宣長関連のものに、「まこと」は武士道、『万葉集』などに関連したものに、「いき」は江戸時代的なものに、多く集中して取り上げられていることがわかった。つまり、こうした語を一括して「日本的美的概念」と呼ぶけれども、論者が

何を「日本的な美」とするかによって、対象とされる概念には自ずと偏向が起ってしまうということである。たとえば、茶の湯を「日本美の代表」だと思えば、自ずと「わび」「さび」といった概念が論じられることになり、「幽玄」や「あはれ」などが論じられることはない。こうしたことが、どの文献にも見られる。したがって、すべての論者が納得する「日本的美的概念」というものは存在せず、それぞれの概念に関する記述を文献から抽出し、丁寧に分析していく必要があると言えるのである。こうした言葉や概念の多くに共通するのは、語義や対象に変化が見られることである。つまり、通時的で普遍的な概念は存在しないのである。翻って言えば、その変化を把握して論じなければ、いつの時代の何を対象として論じているのか、またそれが有効な分析や考察につながるものなのかが判断できない、ということである。

こうした実情があるにもかかわらず、従来多くの研究では、美的概念が通時的かつ普遍的なものとして扱われる傾向にあり、それによって論が観念的なものになってしまっているという事例が多々見られた。

こうした問題はあるものの、すべての「美的概念」を分析・考察対象にするわけにはいかないで、「日本的美的概念」と呼ばれるものに限定し、その語義と対象の変化を明らかにし、そこから何らかの法則性が見出せないかを探ることにした。

(2) 2年目(平成28年度)

先に示した7語の内、「まこと」を除く6語に限定して、語義の歴史的变化を考察した。「まこと」を除いた理由は、二つある。一つ目の理由は、「まこと」という語が「日本的美的概念」と呼ばれることが、他の語に対し、かなり少ないためである。もう一つの理由は、「まこと」には語義の歴史的变化が特に見られないからである。先に述べたように本研究は、「美的概念」とりわけ「日本的美的概念」がどのように形成され、語義を変化させていくのか、また対象の変化ないしは拡大などがあるのか、を明らかにしようとするものなので、「まこと」を除いた次第である。これらの6語、つまり「わび」「さび」「幽玄」「あはれ」「いき」「かわいい」の順に、その語義と歴史の変遷、変化の法則または規則性などについて考察を行った。その結果、以下のようなことが明らかになった。「わび」「さび」の両語は、1930年代まで茶室や茶庭、茶道具などを形容する言葉として用いられていた。「わび」は形容詞「わぶし」が名詞化したもので、これは主に不足した美をいう。それに対し、「さび」は「さびし」が名詞化したものであり、こちらは枯淡な美を指す言葉として用いられてきた。「わび」には時間的経過は必ずしも必要ではないが、「さび」には時間的経過が必要である。時間的経過を経たものだけが「さび」たものとして形容されたのである。ただし、いずれの語も、決して満た

された美ではなく、何かが不足していたり、あるいは欠けてしまったりした不満足な美である点は共通している。こうした語が茶室や茶庭、茶道具などの評語として中世以降よく使用されたのである。明治以降もこうした用法が多く見られたが、主に大正期に「簡素」で「質朴」で「質素」なものが「日本的風流」であり、かつ「日本趣味」であり、「中世美」であるという認識が広まったことから、「わび」や「さび」が「日本的美的概念」として認識されていった。とりわけ「さび」は「寂(じゃく)」という漢語とも通じるため、仏教的な観点からも大いに注目された。と同時に美学においては、「さび」は日本美の完成者・松尾芭蕉(当時はそうした風潮が多かった)が完成する美の前段階として認識されていた。昭和に入ると、「わび茶」の大成者・利休500回忌の影響もあって、「わび茶」、および「わび」という概念にも注目が集まるようになった。先にも述べたように、これらはほぼ一緒に使われていたが、1950年代以降は、利休を代表とする茶の湯の美が「わび」、芭蕉を代表とする俳諧・俳句の美が「さび」という語で語られるようになった。ちなみに、1950年代茶の湯が「わび」という語で語られるようになったのは、世界的な禅ブームによるもので、そこで「無」という価値観が称揚されたからであった(注3)。「幽玄」は、これらの「美的概念」のうち、唯一漢語由来の語である。もともとは「奥深くはかり知れないこと」を言うが、一時的、あるいは場合によって「優雅で上品なこと」をも含むようになるが、歴史上、原義が失われることはなかった。「幽玄」の特徴としては、語義というよりも、「幽玄」という語で形容される対象が変化した点にある。中古から中世にかけて、和歌、能、連歌の評価で用いられた語であるが、もっとも使用されたのは近世に入ってから庭の趣と芭蕉の句に対して用いられた語であった。こうした傾向は大正時代頃まで続く。「わび」や「さび」と同じく、近代における象徴美、中世美の見直しによって、「幽玄」は新たな対象を得る。それが能楽と『新古今和歌集』に対する評価であった。とりわけ1930年代からは能楽と『新古今和歌集』が「幽玄」の代表的なものとして喧伝されていった。前時代まで優勢だった庭や芭蕉の句は「さび」などに取って代われ、1940年代頃「幽玄」とは乖離する。第二次世界大戦後の1950年代以降は、さらに対象が絞られ、ほぼ能楽だけがその対象となっていく(注4)。「あはれ」は、「をかし」とともに平安時代を代表する「日本的美的概念」とされている語である。もともとは感動詞であったと思われるが、それが「しみじみとした情趣」といった意味へと昇華していった。優雅な美とされることもあれば、調和された美とされたり、悲哀を帯びた美とされたりすることもある、かなり複雑な美意識である。とりわけ分析を困難にするのが、「哀れ」ともいうよう

に美しさと同時に悲しさや寂しさを含むことがあることだ。「あはれ」の特徴は、通史的に特定の対象物をもつことはなかったということである。「わび」や「さび」や「幽玄」と比べるとよくわかるが、「あはれ」はそれらに比べかなり主観的であり、瞬間的に感じる美である（感動詞を元にしていないからかもしれない）。したがって、様々な場面で使用されるものの、特定の対象物を持つことなく、平安美という大きな美的概念として認識されていったものと思われる。それに加え、平安美というのは宗教的・道徳的な美から独立した美と見なされることが少なかったため、「わび」「さび」「幽玄」のような中世美ほど近代思潮における再評価の動きがなかったし、組み替えも行われなかったのである。「あはれ」は「わび」「さび」「幽玄」などを準備するための平安期の美的概念であっても、それ以上の「美的概念」、つまり「日本的美的概念」として認識されなかったのである。「いき」については、興味深いことがわかってきた。「わび」「さび」「幽玄」とまったく同じではないものの、ほぼ同様のことが起こっていたのである。この言葉はもともと遊里で使われた言葉で「さっぱりした心意気」などを言うものだが、明治後期から「江戸趣味」とその真髄を「いき」とする論調が勃興した結果、「日本的美的概念」の一つとして認識された「美的概念」である。「わび」「さび」「幽玄」との共通点は、これが象徴美として認識され、高く評価された点であった。だが、異なるのは、これが中世美ではなく、江戸の「美的概念」であるとされたこと、そして象徴美は象徴美でもフランス象徴主義、たとえばアンリ・ベルクソンなどの影響下によって称揚されたものであったこと、そしてその対象は江戸期から一貫して大衆文化であった玩弄的なもの、具体的には歌舞伎、小唄などの音曲、着物の柄、浮世絵などに対して用いられる語であったことである。決してハイカルチャーを評する言葉ではなく、あくまでもサブカルチャーを評する語であったのだ。名著の誉れ高い九鬼周造の『「いき」の構造』（注5）もそうした状況下で書かれたものである。「かわいい」については、増淵（1995）（注6）やP.Chittcang（2015）（注7）が明らかにしているように、もともと「うつくし」とほぼ同義であったが、15世紀に「愛らしい」という意味で使われるようになり始め、19世紀に現在の「かわいい」という意味へと完全に移行した語だという。「かわいい」とする対象は、明治時代以前は肉親や恋愛対象者という非常に限定された人物に対してのみ使われていたものだったが、1900年代以降、子供や動物、人形など、幼くて小さいものに対して広く使われるようになったようだ。また1950年代からは、女性性を有するものに限定されるようになり、男性は「かわいい」対象からほとんど除外されたという。ただし、2000年代になり、「かわいい」が多

様化した結果、現在では「かわいい」男性や、「かわいい」美術などといった用法もよく見られるようになったという。「かわいい」が「日本的美的概念」と考えられるようになったのも、この前後であろうと考えられる。

現在、「いき」という語はほとんど使われない。したがって、大衆文化においては、時代変化に伴って、「いき」が「かわいい」に取って代わられた、と見てもいいように思う。（3）3年目（平成29年度）

「日本美」または「日本的美的概念」に関する外国語文献（英語・ドイツ語・フランス語・オランダ語）を約70種蒐集し、そこに記された「美的概念」の種類を抽出し、該当する概念についての説明に関する部分を翻訳した。その結果、もっとも多く取り上げられていた「美的概念」は「わび」「さび」であり、それに次ぐのは「幽玄」であり、こうした傾向は2010年頃まで続く。ただし、2010年代以降に発行された資料では、「わび」「さび」「幽玄」に変わって、「かわいい」という語が対象となることが多くなる。ここには、日本のマンガやアニメなどのポップカルチャーの世界的進出と、そこで多くのものが「かわいい」という語によって形容されるという現象が背景にあることは、言うまでもない。このことは、「日本のもの＝かわいいもの」という定式が成立しつつあることを物語っているのであろう。と同時に、自分たちの文化の中にも「かわいい」に相当する要素を見つけて、説明し、理解したり、真似したりしようとする外国側の態度も見受けられる。こうした双方向の動きが盛んになされていることから判断すると、「かわいい」はすでに世界的にも「日本的美的概念」と見なされていると断言してもいい状況にあると思われる。こうした「美的概念」とは別に、その対照語として、歴史的に語義変化をした語の一つを取り上げ、分析と考察を試みたので、ここに紹介しておく。その語とは「幽玄」と同じく漢語に由来する語、「痴漢」である。この語を取り上げた理由は、この語が元来「愚かな男」を意味する罵倒語であったからで、「美的概念」とは正反対でまったく無関係と言ってもいいくらい見下されてきた言葉であるからだ。

（4）補論

「美的概念」でないために詳しくは論じないが、ただ先に見た「美的概念」と同様の要因によって、語義変化ないしは概念変化を起こしているため、ここに参考として紹介しておきたい。「痴漢」はもともと字義通り「おろかな男」を意味する口語であり、中国から禅宗の書物（主として禅問答集）を通じて14世紀頃、日本へ流入して来た語である（注9）。最初は禅林という範囲でのみ使われていたが、江戸時代、中国から大量の白話小説が流入し、そこに「痴漢」という語が頻出した。その影響を受けた戯作者たちが、この言葉をよく用いたことから、日本では口語ではなく、

文語としても使用されるようになった。ただし、この過程で語義の変化は見られない。語義が変化するのは、自然主義全盛期の 1900 年代である。後に「出歯亀事件」と呼ばれる事件（1908 年）をきっかけに、「デバガメ主義」といった言葉さえ生まれた。この事件を起こした犯人は「痴漢」と呼ばれ、同じような性質を持つ男、つまり性欲のままに行動する男を「痴漢」と呼ぶことが次第に多くなり、「痴漢」に「女性にみだらな行為をする男」という意味が付け加わり、現在の私たちに馴染みのある意味へと変化したのである。さらに追い討ちをかけたのが、1954 年に起きた「鏡子ちゃん事件」であり、これによって「痴漢」＝「女性にみだらな行為をする男」という意味が決定的になる。この背景には、戦後の肉体文学、実存主義の影響が色濃く横たわっている。それが「日本的」な犯罪という言説が海外からなされるのも同時期のことであった（注 10）。つまり、「痴漢」という語は、「日本的美的概念」が主としてシンボリズムによって強い影響を受けたのに対し、具体的な事件や、リアリズム（誤解を大いに含んだものであるが）によって語義変化を起こしたと言えるのである。

（5）総括と今後の課題

以上のことから、「日本的美的概念」が「日本的」となるためには、近代のヨーロッパの思想の日本における受容の様相が大きく影響していることがわかった。とりわけ主にドイツの象徴主義によって「わび」「さび」「幽玄」が、フランス象徴主義によって「いき」がクローズアップされ、「日本的美的概念」へと昇華していったことがわかった。語義変化ないしは概念の変化は自然に起こるわけではない。ある状況というか環境が変化して初めて変化が表面化するのであり、その逆はありえない。どんな語にも同様のことが言えるように思う。語によって事情は異なるだろうが、状況および環境の変化が、語義変化を生むという法則は共通している。それは一見、「美的概念」とは関係のない「痴漢」という語の変化も、そうであったことからわかるだろう。「美的概念」では、美に関する認識や環境、考え方に変化が起きたことこそが、「わび」「さび」「幽玄」「いき」「かわいい」を「日本的美的概念」にしたもっとも大きな要因であった。現在、「わび」は茶の湯と、「さび」は茶の湯や俳諧と、「幽玄」は能楽とセットとなり、「いき」は大きく「江戸のもの」と固く結びついて定着している。ただ、「かわいい」はまだ固定化されていない。マンガやアニメ、ファッションなど広い範囲でこの言葉は使われている。だが、いずれ「かわいい」も「日本的」な何かと結び付けられ、固定化する可能性がある。それがマンガなのか、アニメなのか、江戸絵画なのか、今はわからないが、「かわいい」が美を語る何らかの理論などで称揚され、それから 30 年経つか経

たないかの内に、ある限られたジャンルと結び付けられる可能性は大いにある。それが何なのかを、今後も注意深く追っていきたい。逆に言えば、「かわいい」もある固定領域、とくに文化的対象を見つけられなければ、将来的には「平成の美的概念」であったと、過去形の形で総括される日が来るかもしれない。「あはれ」や「まこと」が特定の文化的対象を見つけることが出来ずに、過去の「美的概念」とされているように。こうした作業と同時に、今回得られた知見をもとに、より精緻に研究を進め、他の語義変化を起こした語についても、可能な限り検討を行いたいと思う。そうした作業によって、語義変化の法則性がより明確化されるであろう。本研究課題によって明らかになったことを、より精緻にし、公にしていく作業も今後の課題の一つである。

（注 1）水尾比呂志（1971）『わび』淡交社、日本思想史懇話会編（1978）『季刊 日本思想史（特集：日本人の美意識）』第 9 号、ペリカン社所収論文、河野喜雄（1982）『わび・さび・しおり-その美学と語源的意義』ペリカン社、四方田犬彦（2006）『「かわいい」論』ちくま新書、田中久文（2013）『日本美を哲学する あはれ・幽玄・さび・いき』青土社、尼ヶ崎彬（2017）『いきと風流-日本人の生き方と生活の美学』大修館書店、伊藤氏貴（2018）『美の日本-「もののあはれ」から「かわいい」まで』明治大学出版会、など。

（注 2）鈴木貞美・岩井茂樹共編著（2006）『わび・さび・幽玄-「日本的なるもの」への道程』水声社

（注 3）拙稿（2006）「茶道の精神とは何か？-茶と『わび』『さび』の関係史」前傾鈴木・岩井共編著（2006）所収論文を参照されたい。

（注 4）拙稿（2006）『「幽玄」と象徴-『新古今和歌集』の評価をめぐって』、同（2006）「能はいつから『幽玄』になったのか？」前傾鈴木・岩井共編著（2006）所収論文を参照されたい。

（注 5）九鬼周造（1930）『「いき」の構造』岩波書店

（注 6）増淵宗一（1995）『禁断の百年王国-少女人形論』講談社

（注 7）Pornpilai Chittchang（2015）『「かわいい」の歴史的展開-語彙と対象の変遷-』『大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士前期課程修了申請論文』

（注 8）「いき」と「かわいい」に共通点があることは、前傾伊藤（2018）でも指摘されていることである。

（注 9）拙稿（2017）「禅と痴漢」『日本語・日本文化』第 44 号、大阪大学日本語日本文化教育センター

（注 10）拙稿（2014）『「痴漢」の変容-中国から日本への伝播と定着』『日本語・日本文化』第 41 号（大阪大学日本語日本文化教育センター）、拙稿（2014）『「痴漢」の文化史-「痴漢」から「チカン」へ』『日本研究』第

49号(国際日本文化研究センター)、拙稿(2017)「世界『痴漢』発見」『日本語・日本文化』第44号(大阪大学日本語日本文化教育センター)などを参照されたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

岩井茂樹(2016)「禅と痴漢」『日本語・日本文化』第44号、大阪大学日本語日本文化教育センター

岩井茂樹(2016)「世界『痴漢』発見」『日本語・日本文化』第44号、大阪大学日本語日本文化教育センター

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

岩井 茂樹(Iwai, Shigeki)

大阪大学日本語日本文化教育センター・准教授

研究者番号: 60647080

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号:

(4)研究協力者

()